

経営者には、求められる資質として三つの顔（側面）があります。

「経営者の顔」：現状をシビアに分析し、今後を見通す先見性や、その時代に適した手段方法を選択、新たに考案する。的確に打つべき手を打つという資質。

「哲学者の顔」：自社の根幹部分を深く見詰め、思考を重ねていく。会社の存在意義や目的（理念）、どのようなやり方で経営するか（方針）を繰り返し自問し、信念となるまで練り上げる。

「教育者の顔」：文化や伝統、価値観、倫理観など大切なものを次代に継承する。経営者の場合、自分が哲学したことを社員やお客様、取引先などに広く影響を及ぼし、賛同者を増やす。

これら三つの顔は無関係で別々な存在ではなく、それぞれが深く関わりを持ち、連携して初めて有効に機能します。しかし三つの顔を内在していても顕在化していない場合が多く、初めから三つの顔を大いに発揮しているという経営者に出会うほうが稀です。

ある経営者は、大きな苦難に出会ったのち、「この会社は社員のためにある」と考えるようになりました。会社の目的は《自社製品によって、お客様に幸せをお配りする》ことにあり、そのためには《社員の幸せを第一に考える》というのです。

お客様に幸せや喜びを配るのは社員。その社員が幸せや喜びを感じていないのでは、お客様にそれを配ることはできない。だから、社員を幸せにするのが先決という「哲学」です。そして出来る限



え・牧えみこ

経営者に必要な 三つの顔

り社員の幸せを追求するよう路線変更したとき、業績が飛躍的に伸びたのです。

「三つの顔」を養成するための指針を記しておきましょう。

哲学する癖を身につける。「わが社は何のためにあるのか（存在意義・目的）」
「わが社は誰のためにあるのか（社員・お客・地域など）」を深く考えることは、やがてあらゆる判断の根幹を成す。

様々な価値を共有するため、自分の信念を他者（社員など）にも朝礼や会議の場で伝え続け、浸透を図る。経営者が言い続けなければ、周囲への浸透はない。併せて「教育の原点は自己教育にあり」といわれるように、自ら実践励行しなれば感化される者はないということも、肝銘する必要がある。

経営者として現実をシビアに分析し、今日明日の具体的な実践・実施項目が、哲学したことと教育していることと合致している。三つの顔が統合（三位一体）していることこそが正当な姿である。

「三つの顔」を大いに発揮している経営者は、事業規模を広げる際に壁にぶつかかり呻吟した経験や、会社存亡にかかわるアクシデントに見舞われた体験を持っています。「苦難福門」で資質が開花し、経営者として成長を遂げているのです。

しかし、大きな苦難の到来をわざわざ待つ必要はありません。いま抱えている課題に真剣に取り組み、鋭意努力を重ねていけば、三つの顔は自ずと醸成されていくのです。